
aLia ~ 悪魔との契約者 ~

紅坂 怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a L i a ↗ 悪魔との契約者

【NZコード】

N5382X

【作者名】

紅坂 怜

【あらすじ】

三百年もの間、グレティアの民は悪魔との契約を続けてきた。故に彼らは人々から恐れられ、ときには迫害を受けたりもした。けれど、人々は知っている。彼らが何の為に悪魔と契約をするのか。知っているにもかかわらず、人々はまだ彼らの存在を疎み続けているのだ。そして、十年おきに行われる契約の儀式。冬華村の高等学校三年生首席の者は、自身の誕生日に悪魔と契約を交わす。

（11月20日に主人公とその友人の名前を変更しました。未修正がある場合は発見次第修正します）（12月5日あらすじを編集

しました)

いつもと同じチャイムの音が学校中に響き渡る。

「続きは次の授業で行います」

黒板の前にいる女教師は、教卓の上に置いてあつたファイルを手に取つてから言つた。

けれど、僕はもう二度とここで授業を受けることはない。それは言葉を発した当人である女教師も、教室にいる他の生徒たち全員も知つてゐること。

こうして、僕にとっての最後の授業が終わりを告げた。

「起立、礼」

日直の人の声を合図に生徒たちは椅子から立ち上がり、一斉に礼をする。女教師に向かつて、僕はいつもより深々と頭を下げた。「ありがとうございました」という礼をしながらのあいさつも、いつもより心を込めたつもりだ。

眞面目な顔のままの女教師は、窓際の席にいる僕を一瞥し、何も言わずに教室を去つた。

僕たちの高校は各学年一クラス。にも関わらず、どのクラスも人數は少ない。一番多いクラスでも十二人で、一桁のところがほとんどだ。ちなみに僕のいるクラスは十人。多い方ではあつた。

人數が少ない理由は簡単。この学校の生徒や教師たち全員が？グレティアの民？だからだ。この村で暮らす人間は皆グレティアの民だが、グレティアの民全体の人数はさほど多くはなく、村自体も小さい。子供の数が少ないのも当然のこと。しょうがない、というと

「うだりつ。そんなことを今更考えながら、再び椅子に座る。

「龍希」

背後から名前を呼ばれた僕は振り向く。
そこにいたのは、クラスメイトの一条海斗。

僕の後ろが海斗の席で、彼は自身の机に腰を下ろしていた。

「言ひの遅れたけど、誕生日おめでとう」

座っている僕を見下ろしながらそう言ひた彼は苦笑する。

海斗は僕より背が低い。というか、クラスの男子の中で一番低い。童顔だし、下級生だと言われても簡単に信じてしまうだろう。茶色っぽい黒髪の僕とは違い、彼の髪は真っ黒。まあどこにでもいそうな学生だが、海斗は僕にとって一番仲の良い友達なのだ。

「ありがと。悪いな、先に卒業しちまって」

冗談っぽく言つたつもりだったのに、海斗は顔を曇らせてうつむいてしまった。

僕は呆れてため息をつく。そして海斗の左頬を抓つた。もちろん、手加減をして。

「ふあっ！？」

そんな間抜けな声を出しながらも、海斗はやつと顔を上げる。

「大丈夫だよ。あんな儀式、すぐに終わるだろ」「だけど……」

「心配すんなって。お前は僕を信じて待つてればいいんだよ」
抓られた頬を両手で押さえる海斗はまだ何か言いたそうだったが、僕は早口でそう言ひつて自分の椅子に掛けてあつた制服のブレザーを掴んだ。

「ちょうど、その時。

ガラガラと大きな音を立てて教室のスライド式の扉が開いた。僕や海斗も含め、教室の中にいた生徒たち全員がそちらへと顔を向ける。

そこに立っていたのは、スーツを着た三十代前半くらいの男性。整髪料で髪は整えられていて、おまけに眼鏡までしているものだかる。

ら、すこしつかりした人に見える。

「御神龍希くん」

はつきりと男性は言った。僕の方を見て。

「はい」

僕は椅子から立ち上がり、男性のもとへ向かう。

「気を付けるよ、龍希」

「わかってるって」

ブレザーの袖に腕を通しながら、立ち止まらず、振り返らずに僕は返事をする。「頑張れ」ではなく、「気を付ける」と言うあたりが海斗らしかった。本気で心配してくれているのが伝わってきて、なんだかこっちまで緊張してしまう。

「行きましょ」

男性にそう促され、僕は歩き出した彼の後を追いついて廊下を進んだ。

海斗の言った通り、今日は僕の誕生日だ。十八歳になつたけど、あまり嬉しくはなかつた。

それはこれから行われる儀式のせい。何をするのかは知つてゐる。

「嫌な天気ですね」

前を向いたままの男性が話しかけてきた。僕は廊下を歩きながら、窓の外に視線を移す。なるほど、確かに嫌な天気だ。空は厚い雲に覆われていて、まだ夕方なのに暗い。僕は前を歩く男性の背中に、「そうですね」と短く答えておいた。

僕たちの教室は一階にあるため、玄関にはすぐに着いた。靴は履きかえる必要がないため、そのまま外に出る。秋とは思えないほど外は肌寒く、ブレザーを着ておいてよかつたなどしみじみ思った。森がすぐ近くにある土が剥き出しになつた殺風景な土地を少し歩くと、一つの古びた建物が目に入る。旧校舎。卒業式の会場だ。

僕たちは黙つて旧校舎へと足を踏み入れ、歩くたびにギシギシと音を立てる廊下を歩く。天井には蜘蛛の巣、廊下には埃と、掃除が行き届いていないのが丸わかりだ。薄暗いせいもあって、不気味に思える。『とある儀式』を行う以外この旧校舎はまったく使われていないから、当然と言えば当然なのだが。

そして僕はこれから、その『とある儀式』を行う。グレティアの民、それもごく一部の者しか行つことができないとされているその儀式は、僕にとつて卒業式のようなものだ。儀式に成功すれば卒業失敗すればどうなるのかは数日前に村長から教えてもらつてある。死、と村長は言った。その時の彼の顔と声を思い出すと、急に緊張感が増してくる。ああ、さつきまではあんなに軽い気分だったのにな。

そんなことを思つていると、男性が急に立ち止まつた。

「こちらが会場になります」

男性が指したのは、廊下の左手にある両開きの大きな扉。何故か西洋風になつているその扉の隙間からは微かに光が漏れている。「私にはここで見張りをする役目がありますで、御神くんはどつぞ中へ」

扉のノブに手をかけようとする男性に対し、

「自分で開けます」

言って、僕はノブを掴んだ。

この扉の先にはどんな光景が広がつているのか、予想はつく。まだ少し怖いけど、逃げないつて決めたんだ。僕はゆっくりと扉を押し開ける。

成功させたやる。絶対に。

悪魔との契約を。

僕たち グレティアの学生は、一般的な学生が学ぶことに加えて特殊な技術を習得しなければならない。

それは剣や弓、槍などを使う戦闘技術。？戦闘学？という。

この世界には魔獣が生息する地域がいくつもある。今からおよそ三百年前に起きたとある事件のせいで魔界からやつて来てしまって以来、魔獣は人々に様々な悪影響を及ぼしているのだ。農作物などを食い荒らしたりする他、人間が襲われることも幾度かあった。命を落とした者も少なくはない。

そしてグレティアの民には、魔獣を退治するという重要な仕事があるのだ。魔獣討伐の際に必要となるのが戦闘学で、武器を使って魔獣を殺すのが普通。魔界の住人は魔力がなければ存在することが出来ず、絶命すると体内からすべての魔力が放出される。魔力が完全に無くなると、そこには何もなかつたかのように魔獣たちの亡骸は消えてなくなるのだ。

一般的な学力を身に付ける？基礎学？と、戦闘技術を身に付ける？戦闘学？。高校三年生の中で、どちらも僕が一番優秀だった。つまり、首席ということ。

悪魔との契約は十年おきに行う決まりになつていて、その年の高校三年生首席の人間が自身の誕生日に契約者となる。だから僕は今から、この旧校舎で契約の儀式を行うのだ。

首席であるという理由だけで契約者が決まる。悪魔と契約した人間は身体に微量の魔力を自然と纏い、その魔力は契約者の寿命を少しづつ縮めるのだが、僕は特別魔力に耐性があるわけでもない。魔力に耐性のある人間なんて聞いたことないけど、この世界のどこかには存在するのだろうか。

儀式に失敗すれば死に、成功しても寿命が縮む。大抵の生徒はそれを嫌がり、首席になろうとはしなかった。けれど、僕は別に構わ

ないと思つた。死ぬことが怖くないと言つたら嘘になるけど、他のみんながやりたくないなら自分がやつてあげてもいいかな、というような軽い気持ちだつたのだ。もともと自分が生きている意味なんて分からなかつたし、両親を幼い頃に亡くしたせいでの家族もいなかつた。自分が早死にしようが悲しむ人はいない。それはそれで楽なことだ。もしかしたら、海斗くらいは悲しんでくれるのかもしれないけど。

扉を開けた僕は室内を見渡す。まず目に入つたのは、無数の蠅燭。そして、床には大きく複雑な魔方陣が描かれていた。どちらも契約の儀式に欠かせないもので、魔方陣を囲むように蠅燭が並べられているというような状況だ。四方の壁際にはちらほらと人影が認識できた。

かなり広い空間のため、そこはかつて体育館だったのだと思う。生徒はもちろん一般村民の旧校舎への立ち入りは禁止されているが、契約の儀式を行う場合にのみ使用されているということは知つていた。道具さえ揃えば誰でも悪魔と契約できる、と図書館にあつた本に記されていたのも覚えている。要するに、勝手に悪魔と契約を交わしてはならない、ということだ。

僕は魔方陣を見つめながら体育館の中へと数メートル歩く。すると、金属が擦れ合うような鈍い音と共に背後の扉が閉められた。パーテンも完全に閉められている暗い室内では、蠅燭の揺らめく炎だけが頼りとなる。その炎はどこか幻想的に見えた。

「御神くん」

数日前にも聞いた声。呼ばれた僕は、声のした方向である右斜め後ろへと体を向ける。

「心の準備は？」

村長は真剣な表情で問うた。僕はなんとなく笑顔を作り、

「できますよ」

そう言葉を返す。僕の返答に村長は少し表情を和らげると、「これを」と言つてからある物を差し出してきた。

それはガラスでできた手のひらサイズの小さな瓶。中には赤黒い液体。僕の血液がたっぷりと入つている。儀式に必要なため、事前に採血しておいたのだ。本番で指などを切つて血を出してもいいと言われたが、そつちの方が痛そうだったのでやめた。

僕は頷いて瓶を受け取り、振り向いて魔方陣へと歩を進める。歩きながら小瓶の蓋を開け、魔方陣の中央で立ち止まつた。瓶を少しずつ傾け、中に入つていた血を魔方陣の真ん中にすべて零す。高い位置から零したため、辺りに血が飛び散つた。僕は気にせず瓶に蓋をしてズボンのポケットへと入れ、魔方陣の端へと後ずさる。靴の先が魔方陣に触れないようにしながらも、できるだけ魔方陣の近くへ。そんな位置で僕は後退をやめる。

「始めます」

一応報告してから、僕は右手を前に突き出す。魔方陣の中央へと手のひらを向けて。

大きめの深呼吸をした後にもう一度息を吸い、口を開く。

「金色に輝く月、灰色の雲に覆われて」

儀式を行う日の天氣によつてこの部分は変わつてくる。今日は曇りだからこの言葉だ。

僕が第一詠唱を終えると、魔方陣の周囲に風が吹き始めた。風は徐々に強くなり、僕の髪やブレザーの裾を揺らす。

ここに怯んだら終わり。自分にそう言い聞かせながら、僕は第二詠唱へと移る。

「魔の力を持つ異界の者よ、紅き雲と炎のもとに。グレティアの民、御神龍希の名において命ずる」

その言葉を合図に、風が飛躍的に強さを増す。魔方陣は風の壁に包まれて中が見えない状態だ。目を開けているのも辛いほどの強風に耐えきれなくなつた僕は両腕で顔を覆う。

第一詠唱終了から数秒後、風の壁越しに魔方陣から青白い光が差した。魔方陣を通して魔界と繋がった証拠だ。すぐに眩しいくらい強い光になつたかと思うと、その光は一瞬にして姿を消した。

とりあえず儀式は成功したようだ。次に重要なのは、どんな悪魔が召喚されたか。自分と契約した悪魔だし、どんな奴なのか気にはるのは当然だろう。

風はだんだんと弱まっていき、青白い光が消えてから五秒も経たないうちに完全に止んだ。室内は真っ暗。吹き荒れる風の影響で蠟燭の火はいつの間にか消えていた。

僕は目を凝らす。魔方陣の中央に何かいるのはわかるのだが、それがどんな姿をしているのかまでは暗くてよくわからない。歪な形をした黒い塊にしか見えないのだ。

意を決して、その塊に近づいてみる。一步、そしてもう一步、と。三歩目を踏み出した瞬間、僕は息をのんだ。黒い塊を見て いや、その塊の一部を見て。

暗闇の中、一つの赤い目がこちらを見つめていた。

「明かりをつけろ！」

体育館の中にいた誰かが叫んだ。

その声が響いてから数秒後、明るい蛍光灯の光が体育館を照らした。徐々に明るくなるのかと思っていたので、突然訪れた眩しさに僕は右腕で両目を覆う。

ゆっくりと目を開いて、魔方陣の中央へと焦点を合わせる。

「……え」

自然と口からそんな声が洩れた。

時間が止まつたかのよつた感覚に襲われる。思考がうまく働かない。状況が理解できない。

儀式は失敗したのか、とまで思つてしまつた。それほど眼前の光景が信じられなかつたのだ。

確かに、魔方陣の中央には召喚されたのであらう座り込む一つの姿があつた。それが本当に悪魔なのかどうかは別として。

暗闇の中でも光つて見えた、赤い瞳。そこまではいい。悪魔らしいと思つ。

だけど、蛍光灯の光を浴びて輝く金色のさらさらの髪は？ 座り込んでいるせいで地面についてしまつている長く綺麗な髪は、はたして悪魔らしいと言えるのか？

そう、それはどう見ても。

「人間……？」

呟くと、？彼女？はこちらを見上げながら無表情で言つ。

「悪魔だよ、私」

それはそうだ、と心の中で思つた。ただ信じられなかつただけで、この少女が悪魔だということぐらいわかつてゐる。もちろん。あの

詠唱で悪魔以外が召喚されるはずがないのだから。

「えっと、その……は、はじめてまして」

自然とそんなぎこちない挨拶になってしまつ。

すると彼女はにっこりと笑い、

「はじめまして、御神龍希くん」

そう言った。

無表情なときは綺麗な子といつ感じだつたが、笑うと可愛らしい子というような印象を受ける。とてもじゃないけど悪魔には見えない。悪魔の翼も角も尾もないし、まあ黒いワンピースを身に付けているところは悪魔らしいといえば悪魔らしいけど。

とりあえず何か言おうと僕が口を開いた瞬間、「成功したようだな」という村長の声が聞こえた。僕は口を閉じて村長のいるほうへと顔を向ける。

「まだ子供の悪魔か……」

立ち上がった悪魔の少女を見て、こちらへ歩み寄りながら村長はそう言つた。

村長の言葉に少女は少しうまうとしたらしく、唇を尖らせた。

「若いだけで子供じゃないもん」

言うと、彼女の右手の周囲に大量の黒い粒子が舞い始める。粒子は徐々に全長一メートルほどの細いフォークのような形を成して彼女の手のひらに収まつた。それはよく漫画などの中で悪魔が持つているものにそっくりだ。

少女はそのフォーク状のものを、勢いよく床に突き立てた。ガンツという音が体育館内に響く。

得意げな少女の顔に、彼女はやっぱり悪魔なんだな、と僕は少々ビビりながら思った。

る。学校にまだ僕の荷物があるため、さっき来た道をまた戻らなければならぬ。ちなみに村長たちはまだ旧校舎体育館の中だ。

「明日の出発時のことですが、村長は多忙のため見送りに行くことはできないそうです。私だけでも伺いましょうか？」

儀式の会場に案内してくれた男性が体育館の扉の横でそう尋ねてきたが、僕は首を軽く横に振った。

「ありがとうございます。でも、見送りは遠慮せさせてください。好きな時間に出発したいのです……」

「わかりました。それでは、お気を付けて」

お辞儀をしてきた男性に向かつて僕は慌てて頭を下げ、少女と一緒に人でその場を後にした。

儀式の前に校舎の廊下から見たときよりも空は少しだけ暗くなつていた。この調子だと、あと一時間もしないうちに雨が降つてくるだろう。

「あ、そういうええば」

僕は隣に立つ悪魔の少女に目をやり、口を開く。

「名前、聞いてなかつたよな？」

見た目からして同じ年くらいのようなので、なんとなく敬語を使わずに話す。まあ、悪魔だから全然違う歳なのかもしないけど。もしかしたら、何百歳も彼女の方が年上だつたりして。基礎学の中でたまに悪魔や魔界のことを習つたりしたけど、そこまで細かいことは教えてもらつてはいない。

「私の名前？」

「うん」

「ん……Hリイ、でいいや。本当はもっと長い名前だけど、面倒だからHリイって呼んで。私の友達とかもそう呼んでるし。私も君のこと龍希つて呼ばせてもらうね」

「わかった。じゃあ、これからよろしくな、Hリイ」

差し出した右手を、Hリイは無邪気に笑んで握ってくれた。

校舎に着くまでの間、僕たち一人に会話はほとんどなかつた。エリイはずっと辺りをきょろきょろと見回していたし、僕は僕でこれから先のことを考えていたのだ。歩き始めて三分ほど経つてからエリイが寒そうに腕をさすつているのを見た僕が彼女にブレザーを脱いで貸し、「風邪ひくからこれ着ろよ」「ん、ありがと」などと軽く言葉を交わしたのが最後。それからはただ沈黙が続いている。隣を歩くエリイの方を見やると、腰のあたりまである長い金髪と黒いワンピースの裾が、僅かに吹く風の中で静かに揺れていた。その時に気付いたことだが、彼女は意外と背が高い。百七十センチメートル以上ある僕に比べれば低いけど、海斗よりは確実に高いだろうな。

そんなこともつこでに考えつつ歩いていると、前方に校舎が見えてきた。

「……ん？」

校舎のある部分を見て僕は咳く。見慣れた人物にそつくりな姿が昇降口のガラス戸の前にあつたからだ。

もしかして、と思いながら近づくと、やはりそれは思つた通りで。

「海斗？」

彼はガラス戸に背を預けてタイルの上に体育座りのような状態で腰を下ろし すやすやと眠つていた。

「おい海斗、なんでこんなとこで寝てんだよ。起きろつて

「うーん……」

しゃがみ込んで肩を揺らしてみると、海斗はそう唸つてからゆっくりと目を開けた。僕の姿を認識したその瞬間は一瞬にして見開かれる。

「うわっ、龍希ー？ こつからー！」……って、儀式は？ 身体は大丈夫なのか！？」

「質問が多いな……。今来たところだよ。儀式は成功、この通りピンピングしてる」

「そつか……」

海斗はわかりやすく安堵の表情を浮かべた。

「お前こそ、いつからここに？ ……もしかして、学校が終わってからずっと待つてくれたとか？」

問うてはみたものの、

「いや、無事でよかつたよ、本当……うん、マジで……」なぜか海斗は顔を膝に埋めてしまつた。肩が震えているため泣いてるのかもしれない。

「よかつた……生きててくれて……ひつひつ……」

「……つたく、さつきまで気持ちよさそうに眠つてたじゃねえかよ。ほら、顔上げろっ！」

海斗の頭の上に手を置いて声をかけるが、顔を上げた彼は予想以上に本気で泣いていた。

「おい待て、そんなことで本気で泣くな！ 高校生男子だろーー！」

「で、でも！ 僕、本当に心配で……！」

ワイヤーシャツの上に着てている灰色のカーディガンの袖で流れる涙を拭う姿はやっぱり子供っぽくて。ナビ、そんな海斗を見てても恥ずかしい奴だなどとは思わなくて。

不思議な奴なんだ、海斗は。昔からそうだった。小学校一年生のときからずっと同じクラスで、一緒にいるのが当たり前みたいな存在で。喧嘩をしたことも何回かあつたけど、次の日にはむちやんと仲直りできてきて……。

昔のことを思い出しながら、苦笑してため息をつく。

「わかつたから、もう泣くな。僕は元気だから、な？」

「……うん」

頷いて、海斗はもう一度カーディガンの袖で涙を拭つた。

「龍希の友達？」

突然そう声を上げたのは、屈みながら僕と海斗を見下ろすエリイ。海斗は彼女の存在に気付いていなかつたらしく、「え？」と少し驚いたように泣いた後の赤い目でエリイを見上げる。

「ああ、えつと……」こつは一條海斗。エリイの言つた通り、僕の友達だよ

「ふーん……」

立ち上がりながら言葉を返すと、エリイは小さく咳いてから祐希に向かつて手を差し伸べた。

「はじめまして、海斗くん。ほら、君も立ちなよ

「あ、うん、ありがと……」

海斗はエリイの手を掴んで立ち上がる。顔を見る限り、彼はかなり動搖していた。見知らぬ人間が相手なんだから当然だろ？。そして、立ち上がった海斗はやっぱりエリイより背が低かつた。そのことに関しては、誰も何も言わなかつたけど。

「私はエリイ。よろしくね

「よ、よろしく……」

「こつ」と笑つてくる彼女に、海斗は僅かに顔を赤くする。その顔のまま、今度は僕に顔を向けた。

「二人ともどういう関係？ もしかして付き合つてるとか？」

「彼氏彼女の関係じやねえよ。僕はエリイの契約者だ」

「契約？ 何の？」

僕は頭を搔く。まあ、やっぱりそうだよな。こんなに人間みたいな外見の女の子を悪魔だなんて思わないよな、普通。

少し遠まわしに言つてみる。

「僕はさつきまで何してた？」

「何つてそりゃあ、儀式で悪魔との契約を……」

そこまで口に出してやつと気付いたらしく。

「え、マジ？ 嘘だろ？」

「本当」

意地悪く笑つて言つと、海斗は心底驚いたという顔をした。当然の反応だ。

ほんの一瞬だけ、あることが脳裏に浮かぶ。それは海斗が、悪魔であるリリイを拒絶してしまったのではないかということ。悪魔に触れても体に害はないということは学校で軽く習つたが、それでも嫌だという人は大勢いる。なぜなら、悪魔は魔力を持っているから。普段は魔力を出していなければ、その気になれば悪魔はいつでも魔力を放出したりできるということも習つた。近くにあるものはもちろん、魔力があれば少し遠くにあるものでも破壊したりできる。魔法みたいな力なんだ、魔力は。そして、その破壊できる? もの? の中には人間も含まれているから。

けれど、僕のそんな心配は杞憂に終わった。

「よかつたな、龍希！ こんな可愛い悪魔と契約できて！」

そう言ってバンバン背中を叩いてくる海斗には少し呆れたけど。

可愛いと言われた張本人のリリイは特に照れるわけでもなく、可愛らしききょとんとした顔で何も言わずに首を傾げていた。

「あ、そうだ」

背中を叩いた仕返しにそろそろ足首でも蹴つてやろうかと思つていると、海斗はふと思い出したように足元のスクールバッグを掴んだ。その紺色のものが誰の私物なのかなどすぐに分かる。

「ほら、これ。また教室まで戻るの面倒だらうと思つてさ、持つてきておいたぜ。荷物、これだけだろ?」
掴んだバッグを差し出しながら海斗が問う。僕は頷いてから礼を言い、それを受け取つた。

「出発……明日なんだろ?」

「ああ、緊急事態でも起きない限りはな。時間はまだ正確には決めてないけど、午前中には出ようと思う」

そこで海斗が何か言おうと口を開いたのを僕は見逃さなかつた。すかさず、

「見送りには来なくていいからな

早口で言つ。

「え、何で！？ まさか、俺のこと嫌いとか……？」

「違う違う。明日、平日だろ？ お前はちゃんと学校に行けってこ

と」

別に一日ぐらい遅刻しても平気だつて、と抗議する海斗に僕は首を横に振る。

「やっぱり俺のこと嫌いなんじや……」

まだそう言い続ける海斗に呆れた僕は大きなため息をつき、彼の右頬を抓つた。今度は、少し強めに。

「痛い痛い痛い！！」

叫ぶ海斗を五秒程度見てから手を離す。

「あれだけ長い間一緒にいたんだ。それなのに嫌いだなんておかしいだろ。……もうお前に迷惑かけたくないんだよ」

「迷惑なんかじゃない！ 僕はただ自分の意思に従つててるだけで

「それでもダメなものはダメだ。海斗、お前は明日も遅刻しないでちゃんと学校に行け。わかつたか？」

だが、海斗は答えずに黙つてうつむいてしまう。

そんな沈黙が十秒ほど続いてから、海斗は小さく頷いた。それで顔を上げようとしない彼を見て、僕は頭を搔く。

「……もう一生会えないってわけじゃないんだから」

なだめるように言つうと、「わかつてる」という声が返つてきた。

「でも、次に会えるのはいつになるかわからないんだろ？」

「それは……そうだけど……」

確かにそうなのだ。明日からの旅は現世 僕らが今いるこの世

界だ の将来に関わるような重要な任務を成し遂げるためのものなのだが、村人たちはその任務を成し遂げることが簡単なことではないと知つてゐる。だから村人たちは、契約者が任務を遂行できなくても酷く責めたりとかはしない。任務が遂行できずに帰つてきて、別に構わないのだ。さすがに一ヶ月未満とかで帰つてきたら皆

から冷ややかな目で見られるだろうけど。過去に途中で帰つてきた契約者は何人もいたが、最低でも三ヶ月は旅に出ていた。

「何の情報も得られないまま数カ月でのこの帰つてくるか、任務遂行して英雄になって帰つてくるかだな」

わざと明るく笑つた。そこで海斗はやつと顔を上げる。

泣いてなんかない。彼は真剣に僕の目を見てきた。

「お前がどんなに情けなく帰つても、俺はお前を軽蔑したりなんかしない。ちゃんと迎えてやる。……無事でいてくれればそれでいいんだ」

ただ、と続ける。

「……どんな結果でも受け止める、っていう自信はないけどそれがどういう意味なのかはなんとなくわかる。

任務が遂行できずに帰つてきた数人の契約者。それ以外の契約者は皆、帰つてこなかつたということ。その理由のほとんどが？行方不明になつた？というものだ。失踪した契約者たちが今どこで何をしているのかは知る由もないが、恐らくは死んだのだと思う。なぜそうなつたのかもわからない。問い合わせる相手がいないのだから。

十年前、僕のように悪魔と契約を交わした人は帰つてこなかつた。二十年前の契約者も同じ。三十年前の契約者は帰つてきたけど、完全な任務遂行はできなかつた。

海斗はきっと、僕が十年前や一十年前の契約者たちのようになつた時のことと言つてるんだろう。だから、僕は言葉を選びながら口を開く。

「大丈夫だよ。だつて」

だつて、の続きは言おつか少し悩んだけど、言わないと説得力がない。言つてもあまり意味はないかもしれないけど、一応だ。

「僕は三十年前の契約者 任務遂行できずに帰つてきた契約者の息子なんだから」

その言葉を聞いた海斗は気まずそうに目線を落とす。ああ、逆効果だつたかな。やっぱり言わなければよかつた。

僕の隣に立つエリイは、うつむいて目を見開いていた。

悪魔として少しば驚いたりするのかな、くらいのことは思つたけど、ここまで反応は予想外だ。動搖したように右手で口を覆つている。声をかけるべきか迷つたけど、やめておいた。何か訊いてはならないような気がしたのだ。

「と、とにかく、僕もきっと父さんみたいに何事もなく帰つてくるよ。僕だって命は惜しいから死なない程度に頑張る。生きて帰つてくるつて約束するから。頼りないかもしれないけど、信じてくれよ」

「うん」と海斗は力強く頷く。

「信じてる。龍希はちゃんと帰つてくるつて、信じて待つてるよ。

約束する」

右手を差し出してきた海斗は、「男同士だから指切りようつちの方がいいだろ」と歯を見せて子供っぽく笑う。僕はその手を取り、笑い返した。

それから数分ほど三人で話をしたが、その間に海斗がうつむいたり泣きそうになつたりすることは無かつた。本格的に雲が降雨直前のようになつてきたので僕とエリイは海斗に別れを告げたが、彼は僕らの姿が見えなくなるまで笑顔で手を振つてくれていた。

家に着いてから三分後くらいに雨が降り出した。木造の家を叩く勢いの強いその雨は、どうしても不吉なことのように感じてしまう。

「明日までには晴れてくれればいいね」

そう言つたエリイは今、僕の部屋のベッドの上に座り込んで閉ざされた窓から空を見上げていた。

パンやスープ、サラダなどを夕飯として食べ終えた僕らは明日からのことについて話をする。

「ああ、本当にな。……それで、エリイは旅の目的についてどれく

らい知つてるんだ？」

問うと、彼女は窓から僕の方へと視線を移す。

「ほぼ全部、かな？ 三百年前に起きた？ 現世侵攻・虐殺事件？ に
関することと……というか、？アリアの石？のこととかは知つてる」

「……それじゃあ僕から説明することは何もなさそうだな」

エリイは僕が知つてることをすべて知つているらしい。説明す
る手間が省けたのでよかつた。話すと長くなりそうだつたし。

？現世侵攻・虐殺事件？とは、レイアス＝ヴィールドという若い
悪魔が起こした事件。彼は仲間の悪魔数人や魔獣と共に現世に侵攻
し、その際に現世で暮らす大勢の人々が彼らに襲われて命を落とし
た。その殺し方がまた酷かつたらしい。人の全身の肉を食い千切つ
ていく魔獣に、赤子を守るように抱いて命乞いをする母親を赤子ご
と刺し殺したりする悪魔。家や森に火を放つたりもしたそうだ。考
えるだけで気分が悪くなる。

数週間ほど暴れると、レイアス達は魔界へと帰つていった。その
たつた数週間で国民が全滅して滅んだ国もある。とても悲惨な事件
だつた、と幼い頃に親から教わった。

その事件が終わつてすぐに問題となつたのが、？アリアの石？と
いう存在だ。

事件後、魔王から命を受けた一人の使者が魔界から現世にやつて
きて言った。

「我々はアリアの石というものを探しているのです」

その使者曰く、現世に侵攻してきたレイアス達悪魔はアリアの石
というものを使って暴れていたらしい。

本来、悪魔は人間と契約をしなければ現世に長く留まつておくこ
とはできない。最高でも一日くらいだ。しかも、現世と魔界を行き
来るのは命懸けだということも彼らは知つていたはず。そんな危
険を冒してまで現世に来ようと思つたのは、彼らがアリアの石を持

つっていたから。というか、アリアの石があれば一つの世界を行き来することなんて容易いのだ。何も危険なことは無い。

アリアの石には不思議な力があり、簡単に言つと、「魔力を強化することができるもの」だといつ。その力のおかげでレイアス達は無契約のまま現世で暴れることができたのだ。

そして彼らが魔界に帰つたのは、アリアの石を失つたため。石の無い状態でもレイアス達はなんとか魔界に着いたそうだ。必死に辿り着いた魔界で、すぐに処刑となつたが。

魔界の使者から直接話を聞いたこの国の当時の王は思つた。「その石を返したら魔界たちがまた現世に侵攻してくるのではないか?」と。けれど使者は、「このような事件を一度と起こさないようにするためには必要なものなのです」と続けた。アリアの石があれば、魔界と現世を完全に切り離すことができるのです。魔界に石を返すのが不本意なら現世側から切り離してくれても構いません。ですが、アリアの石の気配は魔界にしかわかりませんし、アリアの石の力を使って二つの世界を切り離すのも魔界にしかできません。なので、そちらで魔界を召喚し、契約していただきたいのです。……それが始まりだつた。

現世侵略・虐殺事件が起きてから、今年でちょうど三百年目。事件以来、現世の人々は魔界と契約を交わし続けている。とはいえて、契約しているのはごく一部の人間だけで、十年おきに一人契約というシステムだ。それを決めたのは国王で、僕らが住むこの村？
冬華村？の村人をグレティアの民と名付け、村に一つしかない高校の三年生首席である者に魔界と契約をするよう命じた。

冬華村を選んだ理由は一つ。それは、近くに他の村がなかつたから。いくつもある孤立した村の中からランダムで選んだらしい。

魔界と契約をするのだからそれなりに恐れられたり非難されたりするだろうから、そばに他の村があるとお互いに嫌な思いをするのではないかという配慮だったのだろう。ありがたいと言えばありがたいのかもしない。

余談だが、グレティアとは魔界で昔使われていた言葉で？契約？を意味するとかなんとか。

「うして、今まで何の関わりも持つていなかつた現世と魔界との新しい関係ができた。レイアス達の持つていたアリアの石は現世のどこにあるらしいのだが、いくつかに分かれているため探すのは極めて困難。それでも三百年の間に石の欠片は何個か見つかって、あと半分ほどで完全な形になる。

けれど、ここで問題が起きた。それは？アリアの石の力が弱まつてきている？ということ。石の力が消えれば一つの世界を切り離すことは不可能となり、さらには現世と魔界の境界線が消滅してしまう可能性があるというのだ。境界線が消滅すれば つまり現世と魔界が繋がれば、互いの世界を自由に行き来できてしまうといふこと。そんなことになれば、現世に未来はないだらう。

アリアの石がいくつもあれば問題ないのだが、魔界に一つあるというか、あつた だけなのだ。魔界では一番の宝として厳重に保管してあつたはずらしいのだが、意外とあつさリレイアス達に奪われてしまつたらしい。

石の力が消えるギリギリまで欠片がすべて見つからなければ、きっと国王は大勢の人間に悪魔と契約をさせるはず。そうならないためにも、早く残りの欠片を見つけなければならないのだ。

「明日から？零魔の森？」に向かつて旅をしようと思つんだけじ、いか？」

零魔の森とは、今までに見つかつたアリアの石の欠片がまとめて保管してある場所で、冬華村から北に一週間ほど歩いてやつと到着するという距離にある森だ。

「うん、いいと思う

ヒリイはこくんとうなずく。それから彼女はベッドの上に寝転がり、布団を胸に抱いて顔を埋めた。だが、僅か数秒で顔を上げる。

「そういえば、龍希の『両親は今ビビっているの？』

当然の質問だった。

「挨拶しようと思つたんだけど……共働きで夜遅くに帰つてくる、とか？」

彼女の問いに僕は首を横に振る。

「いないんだ、一人とも。僕が十歳の頃に死んだから」「どうしてまた重い話になるんだろ？ 僕は別に気にしてないことに、皆はすごく心配してしまつ。心配せたり迷惑をかけたりするのはできるだけ避けたいのに。

「そう、なんだ……」

案の定、エリイは顔を伏せた。本当のことは答えずに、適当に誤魔化しておけばよかつたのかもしれない。僕は別の話題を探し、見つけた言葉を口にする。

「お前も風呂、入るだろ？」

しかし、意外なことに彼女は頷かなかつた。

「あー、私はいいや。実は召喚される直前に向こうで入つたんだよね、お風呂。それにもう眠いし……」

言つてから小さく欠伸をした彼女を見て僕は苦笑する。まだ八時だというのに本当に眠そうだ。

「じゃあ僕だけ入つてくるよ。あと、寝てもいいけど風邪はひかないうに」「

「うん。いってらしゃーい」

エリイは眠そうな顔のまま微笑んで、ベッドの上からひらひらと手を振つた。

僕が風呂から出て部屋に戻つてきた頃には、彼女はすでに眠つていた。

強い雨が頭上から全身を叩く。寒い。手のひらが冷たい。
その日は僕の十歳の誕生日だった。

「龍希……」

僕の名前を呼ぶ、母親の擦れた声。

「早く……逃げ、て……」

それが母親の最後の言葉となつた。

真っ赤な血の海に沈む母親の姿を見て僕は立ち尽くす。お母さん、お母さん、とただ繰り返す僕の声。その声に重なつて聞こえたのが、聞き覚えのある誰かの声。そして、大剣を自身の腹に突き刺した父親の叫び声。

「……お父さん、お母さん」

絶命した両親の姿を前に、僕はその二つの単語しか口にすることができなくて。

「ん……」

突然目が覚めた。

ベッドから一メートルほど離れた位置でそれに平行に布団を敷いて寝ていた僕は、上体を起こしてベッドの上を見やる。こちらに背を向けている状態で横になつているため確証はないが、ヒリイはまだ眠っているようだ。

「またあの夢か……」

僕は自身の右手のひらに視線を移して呟く。

両親が死んだ日からたまに見るあの夢。ここ最近は見ていなかつたから随分と久しぶりだった。

やっぱり、まだショックが消えてないんだと思つ。あの時のこと

を思い出して泣いたりとかはしなくなつたけど、悲しくないわけじゃない。寂しくないわけでもない。

けれど年月は経つて、僕も高校生になつた。だから、きっとそういうものなんだろう。

初めはすごく悲しんだりしていても、いつの間にかその人がいなことは当然だと思うようになる。慣れる、ということなんだろうか。まあ、僕が冷めた人間なだけなのかも知れないけど。

でも、それに慣れるということは悲しいことだと思った。
ふと窓の外を見ると、空はよく晴れていた。昨日とは違つ、絶好の旅日和だ。

胸を撫で下ろすような気持ちのまま再び部屋の中へと顔を戻すと、

「……え」

ぐらり、と視界が揺れた。

何だ、これは。頭が痛い。体が重く、熱い。体の中で何かが疼いているように感じる。一番苦しかつたのは呼吸がしづらいということで、僕は胸を強く押さえる。

「う、あ……っ」

止まらない冷や汗に、朦朧とする意識。見つめた自分の左手のひらもぼやける。

やばいな、これ。死ぬかもしれない。契約者が死んだらその悪魔の契約は破棄され、悪魔は魔界に帰るんだつたよな。じゃあエリイは大丈夫か。よかつた。そんなことが頭に浮かんだ。

僕の名を呼ぶ声が聞こえる、直前に。

「龍希……」

それがエリイの声だということはすぐにわかつた。

彼女の右手が僕の左肩を掴む。そのまま素早く布団の上に仰向けの状態で倒されると、僕の目に彼女の姿が映つた。エリイは布団の横に右膝をつき、左足は僕の体の上を跨ぎ、僕を見下ろしている。

そして僕は気付いた。悪魔の羽と角がエリイに生えていることに。エリイ、と言おうとした瞬間、彼女の両手が僕の額にかざされた。僕はわけがわからぬまま反射的に目を瞑る。

その状態でも、エリイが手をかざす僕の額が青白いような光を放つてゐるのはわかつた。

「間に合つて……！」

エリイの声が聞こえる。焦るような彼女の声が。

苦しみが完全に無くなつたのは、数秒後のことだった。

光が静かに消えて、エリイが僕の額から手を離して。それから僕は目を開ける。

「……エリイ」

僕は布団の上から彼女の顔を見上げる。いつの間にか羽と角は消えていて、初めて会つた時と同じ姿に戻つていた。

その時、エリイの目は潤んでいたように見えた。なに、と彼女は泣きそうな声で言つ。

「ありがとう。おかげで助かつた」

僕は言いながら体を起こす。まだ息が荒かつたりしたけど、仰向けの状態を上から見られるのは少し恥ずかしかつたのだ。

やがて彼女は、ううん、と首を横に振る。

「私のせいなの。龍希の今の発作、私が原因なの」

私のせい、ということは。

「もしかして、契約の影響によるものなのかな？」

「……うん」

「ぐん、と頷くエリイ。

「悪魔との契約後、その人は発作が起つての。少なくとも一回は、

ね

こんなに早く起きるとは思わなかつたけど……と彼女は付け足す。

「知つてゐるとは思つけど、人は悪魔と契約したその瞬間から魔力を

纏うわけじゃない。あることをきっかけにして纏い始める。……その？あること？つていうのが、一度目の発作

そこで僕は昨日の出来事を思い出した。悪魔であるエリイとす

に契約を交わしていたのに、海斗に近づき、触れてしまつたことを。「うつかりしてたな……」

「何が？」

「いや、昨日のことなんだけどさ。僕、契約した後に海斗に触つただろ？ 海斗はあの時特に何も言わなかつたけど、内心は嫌がつていたのかもしれないな、つて」

うーん、とエリイは腕を組む。

「契約者が身に纏う魔力はその契約者本人にしか害を及ぼさないってこと、彼も知つてるでしょ？」

「ああ、学校でも習つた」

「どつちにしろ魔力はまだ纏つてなかつたんだし、私は大丈夫だと思つけどね。それに君たち、親友なんでしょ？ それくらいで嫌がつたりしないよ、きっと」

「……だと、いいんだけど」

そんな曖昧な言葉を返してしまつた自分が嫌だつた。わからないんだ。僕は海斗のことを信じているけど、彼が僕のことを本当はどう思つているのかなんてわからない。だから不安になつて、そんな返事をしてしまつたのだ。

なんとなく話を変えたくて、僕はさつきのエリイの言葉で疑問に思つたことを口にする。

「少なくとも一回つてことは、また起きるかもしれないってことだよな？」

「そう。だけど過去には多くても二回までで、一回しか起きないこともよくある……じゃなくて、私が一番言いたいのは……」

エリイはうつむく。長い金髪が彼女の顔を隠し、表情が見えない。彼女が今何を考えているのか、なんとなくわかつた。まだ会つて間もないけど、彼女は優しい悪魔だ。優しい悪魔、なんて言葉はお

かしいとも思うけど、僕は彼女を信じてる。もしかしたら、信じたいだけなのかもしれないけど。

だから僕はそっと手を伸ばす。彼女の頭へと。

「あんな発作、何回でも乗り越えてやるよ」

ポンポンと頭をなでると、彼女は顔を上げた。その瞳は僕をまつすぐに見つめてくる。

「……助けるから」

「え？」

「絶対に助けるから。もしまだ発作が起きてても、龍希のこと絶対に助ける。何回でも」

その言葉に、僕は微笑む。

「ありがと。頼んだぞ、エリイ」

「うん」

エリイはそこでやつと明るい笑顔を見せてくれた。笑顔の方が彼女には似合つけど、なんだか恥ずかしいのとそとは言えない。

契約者にとって悪魔はパートナーのよつなものだ。悪魔にとつての契約者も同じ。

言葉にしなくても分かり合える、そんな関係を彼女と築いていきたいと思つた。

「あれ？」

玄関の木製扉を開けた僕の背後で、エリイは家の外を見て首を傾げた。彼女は僕の横をするりと通り抜け、外に出る。

朝食をとりながらの話の中で、エリイの服装についての話題が出た。彼女は今身に付けているものしか服を持ってきていないということだが、これから格好はどうするのか？ という内容だ。結局、僕の母親の若い頃のものがあつたためとりあえずはそれを貸すという結論に至つた。

黒いタートルネックのTシャツの上に着ているのは、白色の薄いニット生地の服。そこから十センチほど覗く赤いミニスカートは、膝上十五センチ程度だろう。黒いタイツとヒールの無い歩きやすそうなブーツも身に付けているエリイは、何も知らない人からすれば人間にしか見えない。肩に掛けられている布製の袋には替えの服や金銭や日用雑貨などが入っている。

そして僕が着ているのは、灰色の長袖パークとジャージ素材の黒い長ズボン。どちらもサイズが大きいためぶかぶかである。袖などが長い方が温かそうだと思ったのと、どうせすぐ背が伸びるだろうという考え方で約一週間前に買ったもの。靴は白いスニーカーという何ともラフな格好だ。 ある一点を覗いては。

僕の左腰にあるのは、鞘に収まつた一つの剣。わりと細身の短剣で、刃渡りは四十センチ弱といったところ。そこそこ軽いから扱いやすいし、いつも使っている剣ということでこれを選んだ。鍔の中央にはめ込まれている小さな赤い石が綺麗な剣で、十字架を模したような型も気に入っている。まあ、父親のものを合わせても家には剣は三つしかないのだが。

僕が背負っている布でできた袋の中にも、エリイ同様、服など自分の荷物が収まっている。

エリイは家の外に出てから僅か数歩で歩みを止め、地面を見下ろした。不思議に思った僕は、

「どうかしたのか？」

と尋ねつつ、彼女のもとへと向かう。

エリイの横で彼女と同じように地面を見下ろし、僕は目を見開いた。

？頑張れ！？

木の枝などで書いたのだろうか、地面には大きくそつ記されていた。

見覚えのある筆跡。男のくせに丸めの字を書くと、これは昔から変わらないな、と思う。

「……ありがとう」

小さく呟く。

すごく嬉しかった。背中を押してくれたその一言が、明るく送つてくれた、その一言が。

「何か言った？」

「いや……何でもない」

エリイの問いかけに僕は苦笑し、高校の校舎がある方角へと体を向ける。他の建造物や木々によつて視界は遮られてはいたが、それでも僕は微笑んだ。流れ出しそうになる涙を、必死に堪えながら。

頑張るよ、海斗。

優しい友人に、心の中でそう言葉を返して。

信じるといつこととは少し違うのかもしれない。でも、これで十分だ。

楽しかった。海斗と一緒にいることが。嬉しかった。海斗が傍にいてくれたことが。

一緒にいて心から笑うことができるのなら、それは相手を？信じている？といつことになるのではないかと思ったから。

心から笑い合うことができて、心から励まし合うことができて。

。それは？信じ合う？といつことに似ていると思ったから。

だから僕は信じる。海斗のことを。海斗が僕のことを信じてくれているといつことを。

エリイへと視線を移し、もう一度微笑む。

「行こうか」

彼女は僕と同じように笑顔を浮かべ、「うん」と頷いた。

これからこの旅がどうなるのか、僕にはわからない。けれど不安はなかつた。それはきっと、傍にいてくれる新しい仲間ができたから。優しい友人を信じることができるようになつたから。

大きく深呼吸をして、晴れ渡る空を仰ぐ。雲一つ見当たらぬ、

本当によく晴れた日だ。

ゆつくりと顔を下ろし、僕はエリイ 新しい仲間と共に、新しい道を歩き始める。

「契約者が身に纏う魔力つていうのは、その人が契約した悪魔の体内にある魔力と同じなの」

自宅を後にしてからまず話題になつたのは、魔力について。これから旅を続けていくにあたり、知つておかなければならぬことだ。「契約者の発作と同時に起きるのが、悪魔とその契約者の魔力の共鳴。発作の時、体に何か異変を感じなかつた?」

「異変……」

歩きながら胸に左手を当て、発作が起きた時のこと思い出してみる。一番辛かつた呼吸困難、それから頭痛……と蘇る記憶。そこで僕はふと、あのときの不思議な感覚を思い出した。

「なんていうか、いつ……体の中で何かが疼くような感じはしたけど」

「そう、それが魔力の共鳴つていうの。私も同じような感覚がしたから、今朝はそれで目が覚めたつてわけ。あと、一回目以降の発作では契約者の魔力が暴走する可能性もあるから気を付けてね……」
暴走すると、ちょっと厄介だから

「え、マジで?」

「うん、マジで。……まあ、もし暴走しそうになつたら私が止めてあげるよ」

エリイはそう言い、綺麗に並んだ白い歯を見せて無邪気に笑う。それにもしても、魔力に関してここまで詳しいことは知らなかつた。「詳細は契約した悪魔に聞け」というような暗黙のルールが存在していたようで、事前には大まかなことしか教えてもらつていなかつたのだ。突然いろんな話を聞いて、正直頭がパンクしそうだつた。

「そういえば、龍希は今まで生活費とか……どうしてたの？」
遠慮がちにエリイが問う。今まで？といふのは、僕の両親が死んでからということだろうか。

それなら、と僕は口を開く。

「村長たちが資金の補助をしてくれてたんだ」

「へえ、優しい人たちだね。現世つてどの地域もそんな感じなの？」
「それはどうだろう？僕の両親の死因は特殊なものだつたから」「そう言ってから後悔した。まずい流れになつたな、と。できれば両親の死因については話したくない。特に、エリイには。

「あつ」

だから僕は少し大袈裟に声をあげる。

「どうしたの？」

僅かに目を丸くして首を傾げたエリイに、「ほら、あれ」と僕はある場所を指差す。

僕の指した先には、二十人ほどの人の群れ。僕たちが今いる場所から五十メートルくらい離れた位置にある村の出入口のすぐそば、つまり僕たちがこれから通る道にその人々はいた。

「何してるんだ？」

不思議に思いつつ歩みを続けると、人だかりの中の一人 近所に住む小学生だった が僕たちの方を見た。その子供が他の人たちに何かを言つたかと思うと、そこにいたすべての人気が一斉にこちらを向く。僕たちの姿を見つけるなり、その中の数人が笑顔で手を振ってきた。

「見送りに来てくれたんじゃない？」

微笑むエリイ。

見送りだなんて、と僕は驚いた。嘘だろ、と。でも、そうとしか考えられないのは事実で。

動搖しつつも歩き続けると、彼らまでの距離が約二メートルとうところで、

「よつ、龍希！」

そう声をかけられた。

「頑張れよ！」

「気を付けてね、龍希くん」

「お兄ちゃん、元気でね！」

口々に言つ人たち。その人だかりの中の誰もが、こすり笑顔を向けてくれていた。

「龍希くん」

静かな、けれど優しい声で僕の名前を呼んだのは、海斗の父親。彼は静まつた群衆の輪から一步外に出て、僕の目を見つめる。

「君はこの旅の中で、一度は必ず傷つく」とになるだろつ。……体ではなく、心が」

「はい。覚悟しています」

「……そうか」

海斗の父親が言つたことがどういう意味なのかは、その場にいた全員がわかつていただけた。

心が傷つく。その理由は、僕らがグレティアの民だから。三百年前から、疎まれていた存在だから。

昔、誰かが言つていた。「俺たちグレティアの民は皆が嫌がる？悪魔との契約？をしてやつてているのに、何故疎まれなければならぬのだ」と。その通りだと思つ。でも、グレティアの民が疎まれたり迫害を受けたりすることに納得してしまう自分もいた。僕がもし一般人として生まれていたのなら、同じようにグレティアの民を疎んでいたかもしれないなどと思つてしまつていた。

「負けないでくれ、龍希くん。無事に帰つてくれ。……私たち
は、ここから祈つてゐるよ」

「……はい。ありがとうございまます」

一礼し、微笑む。海斗の父親もまた、笑顔を返してくれた。

「それと……」

海斗の父親はその表情のまま、今度はエリイに視線を向ける。エリイはびくつと小さく肩を震わせ、怯えるように僕の服の裾を掴む。

「海斗から話は聞いたよ。君が龍希くんと契約した悪魔だろ？」「君も頑張ってくれ」

その言葉にエリイは目を丸くする。予想外の言葉だつたらしい。

正直、僕も少し驚いたくらいだ。

「あ、えっと……頑張ります」

笑顔を向けてくる海斗の父親に、エリイは警戒を解いて笑む。

「それにも、こんなに可愛いいらしい悪魔と契約できるなんて龍希くんも幸せ者だな」

そんな台詞を口にした彼に、やつぱり海斗の父親だな、と僕は心中で苦笑する。

「それじゃあ、また。……行つてきます」

もう一度礼をし、僕は顔を上げてエリイと共に歩き出す。

背後から聞こえてくる見送りの声に、十歩ほど歩いたところで歩きながら振り返って大きく手を振る。海斗の父親たちも、こちらに向かつて手を振ってくれた。

グレティアの民は人々から疎まれている。

そして、それ以上に 悪魔たちが疎まれている。

だから僕は決意した。何があつても、エリイを守ろうと。

村を後にした僕たちが最初に向かうのは？幽琳村？。ここから北へ向かつた場所にある村で、面積も人口も冬華村より上だ。零魔の森へ向かう途中にあるため、なんの心配もなく立ち寄れる。旅費として国から支援金が出るため、金銭的な問題もない。ちょっとだけ観光もしたいと気楽に考えていたくらいだ。

長い金髪を揺らしながら僕の右隣を歩くエリイ。契約したばかりの昨日と比べ、彼女との距離は少しあ縮まつたのだろうか。

お互い秘密にしていることがまだあるはず。その秘密を打ち明けられるような距離に早くなりたいと思った。そしてその時が来たら、僕は彼女にきちんと打ち明ける。

八年前、僕の両親を殺したのは悪魔なのだと。

「ねえ、それ本当なの？」

薄暗い一室でベッドに腰を下ろしてそう声をあげたのは、栗色の髪と金色の瞳を持つ少年。華奢な体躯と少し長めのショートヘアに加え、中性的な顔立ちと声ということだけで女子に見えないこともない。中学生くらいの外見だ。

彼の視線の先には、閉ざされた窓ガラスに右手を添えて夜空を見上げる一人の少女の姿があった。ミディアムボブの髪は藍色。年齢は高校生と同じくらいだろう。

そんな彼女はくすっと笑い、背後に座る少年の方へと体を向ける。「間違いないわ。あれは絶対に？あの子？の魔力だった。今年はあるの子が召喚されたのね」

楽しそうに話す少女に、少年は笑顔で言葉を返す。
「よかつたじやん。久しぶりの再会なんでしょう？」

「ええ、もう何年も会つていなかつたもの。現世で会えるだなんて思つてもみなかつたけれど、嬉しいわ」

言い終えてから、彼女は再び窓の外の夜空に視線を移す。そして、紫色の瞳を細めて妖艶に笑んだ。

「彼女たちには、きちんとおもてなしをしてあげないと」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5382x/>

aLia～悪魔との契約者～

2011年12月5日22時49分発行